



Title	従属節における「ものだ」の生起について
Author(s)	張, 力丹
Citation	国語国文研究, 162, 68(1)-54(15)
Issue Date	2024-03-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/94582
Type	journal article
File Information	162_4.pdf



従属節における「ものだ」の 生起について

張 力 丹

1. はじめに

本稿は、(1)(2)のような助動詞の「ものだ」と意味上関連性が見られる、従属節に出現する接続表現について論じる。「ものだ」に関わる接続形式に「ものだ」の意味の残存度を明らかにする。

- (1) そして気がつくと、早いもので、三十周年を迎えていました。(BCCWJ、書籍、新選組永倉新八のひ孫がつくった本、杉村和紀(著)、下線は筆者)¹
- (2) 人間というものは、歳を取るにつれて角がとれて丸くなっていくものなのに、二子玉は丸くなる機会を自ら切り捨ててしまいました。

従属節に現れる「ものだ」に関わる諸形式は、主節と従属節との論理的なつながりという役割を与えるため、2つの事態を結びつける接続助詞になるわけである。「もの」を含む複合辞は、「ものだ」の活用としての性格が比較的強いと高橋(2018)において指摘されているように、「ものだ」の活用形がそのまま接続助詞になり、もしくは「が」「けれども類」のような接続助詞と結合して複数の形態素のある複合接続表現になることもある。しかしながら、ほかの接続助詞と複合することができるとはいえ、以下のような確実に助動詞でなく完全に形式名詞とコピュラとの複合形式であるものもある。このような「形式名詞+コピュラ」の複合形式しか読み取れない「ものだ」は、本稿の研究対象外とする。

- (3) また、国際旅団ではないが、共和国陣営のマルクス主義統一労働者党(POUM)の民兵隊に加わったイギリスの作家ジョージ・オーウェルも、「なぜ義勇軍に参加したのかと尋ねられたら、ほくはファシズムと戦うためにと答えただろう。そして、何のために戦うのかと尋ねられたら、すべての人間を人間たらしめるものために、と答えたろう」と断言している。

¹ 以下、典拠を示さないものはすべてBCCWJからの引用、下線は全部筆者によるもの。

- (4) 1 リーダーが「とんだとんだ」といったら、みんなは「何がとんだ？」と聞き返す。
- 2 リーダーが「○○○がとんだ」といって、とぶもののだったら、〈はく手三回〉。とばないものだったら〈あーらたいへん〉と答えます。
- (5) ベレニスも舞台端で相変わらず袖幕と遊んでいる。大体彼の衣裳は黒っぽくてよく見えないのだが、更に照明を絞るものだから、この間は彼の影しか見えず、芝居全体における彼の影の薄さを象徴する。

なお、本稿は、個々の接続表現の用法間の相違を細かく検討するためのものではないことを断っておく。したがって、先行研究についても、本稿の趣旨と関連性があるものに限って述べることとする。

2. 本稿の捉え方

本節では先行研究を踏まえて本稿の捉え方を提示する。

2.1 「もの+だ」と「ものだ」との区別

本稿の捉え方としてまず示しておきたいのは、形式名詞の「もの」にコピュラの「だ」が後接した「ものだ」と、1つの固まりの助動詞としての「ものだ」²とを見分ける基準である。

- (6) 古くなって黄ばんだ封書がひとつの戦後をよみがえらせる―。それは松本重治さんの高木八尺さんあてのものだ。千九百四十七年、松本さんは日米開戦前の何年か同盟通信の編集局長だったという理由で公職から追放された。
- (7) 学生は勉強するものだ。 (高橋 2010 : 137)
- (8) 人間はみな寂しいものだ。 (日本語記述文法研究会編 2003 : 111)

判断基準として、「もの」を主語や主題に意味の近い別の単語で置き換えられるかということで区別できると考えられる。例(6)における「ものだ」は「もの+だ」の構造でありつつ、削除すると文意が変わり、文としても成立しなくなる。この場合、助動詞の「ものだ」と判断されないのは、ここでの「もの」が「封書」や「手紙」などに置き換えられることに起因する。「それは松本重治さんの高木八尺さんあての封書／手紙だ」は自然な文になるが、抽象性の高い「もの」が用いられる文とはやや意味が異なっている。例(7)における「もの」を主題と意味の近い「生徒」に置き換えられ

² 記述の冗長さを避けるために、本稿では、形式名詞の「もの」にコピュラの「だ」が後接した「ものだ」を「もの+だ」、1つの固まりとしての助動詞の「ものだ」を「ものだ」で記す。

ば非文になるのみならず、聞き手に対する行為要求の発話内行為もなくなるため、ここでの「ものだ」は「もの+だ」に解釈されない。例(8)の「もの」が「生き物」に置き換えられれば、「人間はみな寂しい生き物だ」はやや不自然さを覚えるが非文とは言えない。一方、「一般的には、人間はみな寂しいのだ」という人間の特質について一般論のように述べる文にもなりうる。「もの+だ」と「ものだ」とは確かに排他的ではない連続的な関係であるため、例(8)は「もの+だ」と「ものだ」との間の中間的な存在であるように見えるが、実はこのような場合、複合形式の性質が背景化して、助動詞としての性質が前景化している。すなわち、助動詞の〈一般性〉が読み取れるのは普通である。

2.2 助動詞としての「ものだ」の活用体系

「ものだ」に関わる接続形式のうち、助動詞としての「ものだ」の活用形式から由来したものと考えられるため、まずは助動詞の「ものだ」の活用体系を提示しておく。元来の出自から、表1の活用体系が想定される。

表1 助動詞の「ものだ」の想定される活用体系

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
もの-	-で	-で／-に	-だ	-な／-の	-なら(-ば)	—

助動詞の「だ」の活用体系を受け継いで助動詞の「ものだ」の活用体系が形成されるため、表1も同様に格助詞と同一形態のものと、/n/系列(多くが被覆形)が混在している。「もので」は「ものだ」の連用形として使われるのに対して、「ものに」はそのような形として認められ難い³。「ものな」は「ものなのに」の場合にしか連体形として用いられない一方、「ものの」は「ものだ」と関係なく逆接を表す接続表現である。いずれも「ものだ」の連体形としてはみなされにくい。それでは、「ものだ」に連体形がないということになるのだろうか、そうではない。その連体形はほかの活用形と同様に「だ」に由来したものではなく、補充法により存在詞「ある」を含む別系統の「である」の活用体系から借りたものと考えられる。「だ」には本来命令形がないため、「ものだ」にも命令形がないことになる。以上をまとめると表2のようになる。

表2 「ものだ」の活用体系

語幹	未然形	連用形	終止形	連体形	假定形	命令形
もの-	-で	-で	-だ	-である	-なら(-ば)	—

³「ものに」の後ろに必ず軽動詞の「なる」や動詞の「変わる」のような語がくる。「ものになる」の用法があるにもかかわらず、それは「ものだ」の連用形と認められず別の使い方とする。

以上の活用形式のすべては従属節に現れうるものではない。「ものだ」の未然形「もので」に「は」を介在させて打ち消しの助動詞「ない」が下接すれば、助動詞の「ものだ」が表す当為性に対して、「ものではない」は所与の事態の成立が望ましくないという意味を表すものになる。しかし、それは主文の述部に限られる。「ものではない」が従属節に出現すると、考察したところ、聞き手が実行した行為に不満を表明し、非難する際に用いられやすい（日本語記述文法研究会 2003：112）という1つの固まりの形式としての意味用法が失われ、単なる形式名詞「もの」に「だ」の未然形が来てから打ち消しの助動詞が連なる構造になる。ゆえに、「ものだ」の未然形は本稿の考察対象外とする。また、「だ」と文体の異なる形式として捉えられる「である」形と「です」形を考慮すれば検討がさらに複雑になることから、連体形の「ものである」という別系統から借りたものは紙幅の都合上割愛する⁴。

このように、本稿の検討対象となるのは、連用形の「もので」と終止形の「ものだ」、仮定形の「ものなら（ば）」という3つである。終止形の「ものだ」それ自体は接続表現になることはないが、「が」や「けれども類」のような接続助詞との複合形式ならば従属節を成すことができる。また、「ものな」を助動詞の「ものだ」の連体形として認めないにもかかわらず、さきに述べたように、逆接表現の「のに」を後続させるならば「ものだ」と意味上の関連性を見出すことがあるため、本稿の検討対象として取り上げることとする。

終止形の「ものだ」と連体形の「ものな」は、ほかの接続助詞と組み合わせさってから従属節に現れうるため、1つの分類にまとめる。一方、連用形の「もので」と仮定形の「ものなら（ば）」それ自体は従属節において接続表現になる点で終止形と連体形と異なっている。

2.3 助動詞としての「ものだ」の意味用法

「ものだ」についての本格的な研究は、おそらく寺村（1984）に始まった。それ以降の研究は、寺村（1984）の考えを批判してはいるが、基本的に受け継いでいる。①〈本性、本質〉⁵ ②〈当為〉③〈回想〉④〈驚き〉は研究者を問わず「ものだ」の派生した意味用法として認められそうである（初山 1992、坪根 1994、日本語記述文法研究会編 2003、高橋 2018 など）。寺村（1984）で提示された〈説明・解説〉に関しては、それ

⁴ 連体形の「ものである」が接続助詞になることはないが、従属節を形成することができるかと査読の先生よりご指摘をいただいた。「学生は勉強するものであるのに／ので／なら／が、…」のように、接続助詞が下接できる。

⁵ 呼び方がそれぞれ異なっているにもかかわらず、初山（1992）の〈一般的傾向性〉、坪根（1994）の〈本性・本質を表す〉、日本語記述文法研究会編（2003）の〈本質・傾向〉、高橋（2018）の〈本質・傾向〉のいずれも、表したものの自体にほとんど違いないため、ここで先駆的な寺村（1984）の言い方を引くことにした。後に続く〈当為〉〈回想〉〈驚き〉は寺村（1984）の言い方を略して示している。

を表す「ものだ」は「もの+だ」の性質がより強いため、助動詞の「ものだ」の意味用法として認めないこととする。

〈回想〉は、単に、過去に常態であったこと、くりかえしあったことを述べる言いかた（たとえば英語の‘used to’）ではなくて、ある特別の感慨、なつかしさをもって過去をふりかえる情緒的な要素がなければ成立しない（寺村 1984：304）。寺村（1984）以降の研究ではその情緒的な要素を軽んじる傾向がある。〈本質・傾向〉のような事態に対する評価的な記述をするところに重点を置いている用法、〈当為〉のような行為の実行を働きかける用法とは異なり、〈回想〉は〈驚き〉と同様に事態に対するある感情を表すところに重点が置かれるべきだと考えられる。ここでは、〈回想〉と〈驚き〉を1つの類別に統一させることとする。「ものだ」に前接した連体修飾部にテンス分化が許されるかどうかを基にして「ものだ」の意味用法を以下のように整理しておく。

● テンス分化が許される（非タ形もタ形も許される）：

①〈一般性〉：個人的な考えや判断を一般的なものとして引き上げる。話し手が直接経験したことにとどまらず、知識として話し手に内蔵している現在と離れた昔のことを表すことも可能である⁶。

②〈情緒性〉：ある事柄・できごとに対する懐かしさや意外性、確認性などある特別の感慨を軽く表出すること。知的判断を含んでいるため、現前において突如として生じた感情を表すことには適さない。

● テンス分化が許されない（非タ形しか許されない）：

③〈当為〉：話し手が常識として収蔵していることを提示することで、聞き手に行為の実行を働きかけること。

〈一般性〉は坪根（1994）で使われた用語を援用したもので、従来の〈本性〉や〈傾向〉などが示した意味とほぼ同様である。ただ筆者は、話し手が個人的な考えや判断を一般論的なもののように思っている点を重視するため、ここでは〈一般性〉を用いることとした。また、先行研究でよく認められている〈当為〉の用法はそのままに使うこととした。前述したが、〈回想〉と〈驚き〉との用法について、ことがら・事態に対して感情を表出することこそが重んじられるべき点であると考えられるため、本稿では両者を統一させて〈情緒性〉と名づけた。

⁶ 以下で示されている例文について、自ら経験することはあまりないため、〈回想〉に解釈するのは難しい。書籍やテレビ番組などから得た知識を一般論的なものとして話し手が引き上げる。今現在の〈一般性〉を述べるのはもちろん、知識として頭の中で所蔵している今現在ですでに適用していない昔のことについても、その〈一般性〉を述べられる。

例：戦国の世では、長男は後継ぎとして特に大切に育てられたものだ。（坪根 1994：72）

〈一般性〉は助動詞の「ものだ」の基本的な意味であり、〈当為〉は〈一般性〉から生まれた聞き手に対して行動を要求する意味である。その一方で、〈情緒性〉は〈一般性〉を根底として専ら感情を表すさらに発達した用法である。「ものだ」に関わる接続形式に助動詞の「ものだ」の意味の残存度は、〈一般性〉〈当為〉〈情緒性〉をどこまで残しているかを基準に判断する。〈一般性〉のみ残しているのを残存度の低いもの、〈情緒性〉まで残しているのを残存度の高いもの、どのように決めていく。

3. 従属節に生起しうる諸形式

従属節に生起しうる「ものだ」に関する諸形式を、活用形がそのまま接続表現になるものと、活用形がほかの接続助詞と複合してできたもの、という2つに分けて検討を進めていく。

3.1 活用形がそのまま接続表現になる形式

3.1.1 「ものだ」の連用形―「もので」―

「で」は元々「にて」が音韻変化を通じて転じたものである。「ものだ」の連用形「もので」は連用中止法であり、形容詞、連体詞、動詞に接続する。

- (9) そして気がつくと、早いもので、三十周年を迎えていました。 (= (1))
- (10) おもしろいもので、こうしたやり方で何ヵ月もやっていると帳尻は合ってくるものでした。増えたり減ったりしても、最後はちょうどいいところにおさまってくる。
- (11) 本当は、会いに行くのも気が進まなかったんだ、俺は…おかしなもので、犯罪の現場で“賊”と“警察”として顔を合わせているときは、まだ比較的平静でいられる。だが、あの酒場のときのようにレイチェルと会うと、急に緊張してしまい、どうも本来の自分とずれた感じになってしまう。
- (12) はるゑさんはびっくりして家に飛んで帰り、食べ物を集めてきて、私たちに食べさせてくださったそうです。ああいう非常時を、ともに通りぬけてきた人は忘れられないありがたいもので、今でもいちばん親しい友人の一人です。

(9) から (12) までの例文は、「もので」に、「早い」「おもしろい」「おかしな」「ありがたい」のような形容詞あるいは連体詞が前接している。(9) と (10) の例文における「もので」を取ってしまえば、後ろに読点がくるため、形容詞の「早い」と「おもしろい」は連体形から連用形になる。しかし、「*早く、三十周年を迎えていました。」「*おもしろく、こうしたやり方で何ヵ月もやっていると帳尻はあってくるものでした。」というのは非文である。「早く」「おもしろく」のような形容詞の連用形で成立しない(9) と (10) を、「早くて、三十周年を迎えていました。」「おもしろくて、こうしたやり方で何ヵ月もやっていると帳尻はあってくるものでした。」のように、形容詞の連用中止形（無標の中止形）に変えれば不自然に感じられるかもしれないが非文とは言え

ない。例 (11) の「おかしな」は体言しか後続しかねる連体詞で、「もので」を取り去ると非文になるが、それとほぼ同義である形容詞の「おかしい」の連用中止法、つまり「おかしくて」にすると文が成立するようになる。しかしながら、例 (12) の「もので」を削除してまたその前の形容詞を連用形にして、「ああいう非常時を、ともに通りぬけてきた人は忘れられないありがたく、今でもいちばん親しい友人の一人です。」という文に変更すれば自然とは言えないが適格な文が得られる⁷。つまり、例 (12) における「ありがたい」は、無標の中止形「ありがたくて」が成立するのみならず、連用形「ありがたく」も用いられる。

例 (9) から例 (12) までにおける「もので」は、接続助詞として働いて、感嘆や驚きなどの気持ちを軽く表していると考えられる。すなわち、「もので」は接続助詞でありつつ、助動詞の「ものだ」の意味が残存している。助動詞の「ものだ」と意味的に関連性が見られ、つまり〈情緒性〉が引き出されるため、「もので」は助動詞の「ものだ」の連用形とみなすことができる。しかし、「もので」を取り除いたときに形容詞の連用形が成立しない例 (9) と例 (10) と、連用形でも連用中止形でも文が成立する例 (12) とは必ずしも均質的なものではない。

「もので」の情緒的な用法が成り立つのは、形容詞と「もので」とが一体となって文修飾の用法になることに起因すると考えられる。(13b) (14b) に示しているように、従属節と主節とを逆にすると、「もので」に先行する語が主節の述語になることができる。つまり、「もので」のある従属節は、主節全体に係っている。形容詞と「もので」とが結合して1つの固まりとみなせるこの文修飾用法は、その全体が副詞に近い機能を持つようになる。特に「早いもので」は構文化が進んでおり、時間が経つのは速いと感じることを、「早いなあ」のように情緒的に表現する場合ではよく使われる慣用句になっている。文修飾の用法は形容詞の連用形にないため、(9)～(11) の例文における「もので」を取り去り、形容詞の連用形にすると非文になるわけである。

- (13) a. 早いもので、三十周年を迎えていました。 (例 (1) の一部再掲)
b. 三十周年を迎えていたのは早い。
c. 三十周年を迎えていました。それは早い。
- (14) a. おもしろいもので、こうしたやり方で何ヵ月もやっていると帳尻は合ってくるものでした。 (例 (10) の一部再掲)
b. こうしたやり方で何ヵ月もやっていると帳尻が合ってくるものであったのはおもしろい。
c. こうしたやり方で何ヵ月もやっていると帳尻は合ってくるものでした。それはおもしろい。

⁷ 「ああいう非常時を、ともに通りぬけてきた人は忘れられないほどにありがたく、今でもいちばん親しい友人の一人です。」だと自然な文になる、と査読の先生よりご指摘をいただいた。

さらに、(13b)(14b)のほか、(13c)(14c)のように2つの文に分けられる。しかし、(13a)と(14a)は「もので」があって知的判断を含むため、意味上(13b)(13c)と(14b)(14c)と少しでも差異が出てくる。文修飾成分として、形容詞と「もので」との結合は以下のようにまとめられる。

(15) ～もので、……。

↓
…… (な) のは～。
……。それは～。

なお、形容詞と「もので」との組み合わせはすべて文修飾の機能を持つわけではない。「もので」が〈一般性〉を表していると読み取れるとすれば、「もので」と先行する形容詞とは1つの固まりで主節を修飾する要素として認められないものになる。

(16) 人間というのは欲深いもので、一度手に入れた利権は決して自分からは手放さない。

「人間というのは欲深いもので」を完結した文にすれば「人間というのは欲深いものである／ものだ」になる。その完結文は自然な文であり文意もあまり変わらない。前述したように、この場合では、「もの」が「生き物」のような主題に意味の近い表現に置き換えられるにもかかわらず、〈一般性〉が前景化しているため、「もので」は助動詞の「ものだ」の連用形と認められる。「*一度手に入れた利権は決して自分からは手放さないのは人間というのは欲深い」が非文になるため、「人間というのは欲深いもので」は「一度手に入れた利権は決して自分からは手放さない」を修飾する文としては認められない。このように、〈情緒性〉を表す「もので」と異なって、「もので」が〈一般性〉の意味を表すとき、先行する形容詞と一体化して文修飾の機能を果たすものではない。

(17) はっきり言って疲れます。こんなシアワセなことはないと頭では分かっているけど、やっぱりストレスはたまってしまうもので、何かよいストレス発散方法はないものかと、現在試行錯誤しています。

(18) それからすぐにまた暇生活に戻るのがですが、その暇解消に自分のホームページをつくりました。世間に暇人はいるもので、毎日三百人近くの暇人が覗きにきてくれております。

例(17)と例(18)は「もので」の前に動詞がくる例文である。「もので」を取ってしまおうと、「こんなシアワセなことはないと頭では分かっているけど、やっぱりストレスはたまってしまい、何かよいストレス発散方法はないものかと、現在試行錯誤しています。」「世間に暇人はいて、毎日三百人近くの暇人が覗きにきてくれております。」とい

う文になる。文法的には適切な文であるが、〈一般性〉の意味合いが付加される「もので」のついた文とは文意が違う。例 (16) と同様に、文修飾の機能を持っていないものである。

3.1.2 「ものだ」の仮定形―「ものなら(ば)」―

坪根 (1996) は、意志・推量を表す助動詞「う・よう」の連体形に接続した「ものなら」は「一般的に考えられないような状況であるという話し手の意識がありそれを「ものなら」で表している」という深層にある意味を含むと述べている。すなわち、「ものなら」における「もの」の持つ〈一般性〉が「一般的には考えられないが」という意味を添え、その結果、実現の可能性の低い事柄の仮定を表すと坪根 (1996) は考えている。

坪根 (1996) の説明に対して、藤田 (2013) は、「もの」が「一般的」という意味の性格をもつのなら、「A ものなら B」の「A ものなら」が、「A と一般的に考えられるなら」等の意味にならずに、どうして「一般的に A は考えられないが、もし A と仮定するなら」のような「深層にある意味」になると考えられるのか、よくわからない (藤田 2013: 135-136) のように、その説明に強引さを感じたうえに、A で示した事態は、「一般的に考えられないこと」とか「ほとんど実現不可能なこと」などとして捉えられない例もごく普通に目につくため、坪根 (1996) の論説を受け止めていない。

「～ものなら」を主たる対象として論じたのは、おそらく藤田 (2013) のみである。藤田 (2013) は、「～ものなら」の前に可能形も「う・よう」も現れうるが、それらを区別せず一括して論じることは事実の捉え方・整理として妥当ではないと考えるため、「～ものなら」について、ア)「～ようものなら」の形をとるもの、イ)「(よう)」を伴わない可能表現の述部を承けるもの、ウ) (同じく) 可能表現でない述部を承けるもの、という3通りのタイプに分けている。しかも、「ものだ」の基本義とされている〈一般的傾向〉の意味を敷衍して、「現実・事実としてあることは～だ」「～である、それが現実・事実としてあることだ」のように理解している。以上を基にして、イ) とウ) は、「～である、それが現実・事実としてあることなら」といった意味合いの表現だと結論している。すなわち、イ) とウ) の場合、「～ものなら」は「ものだ」の基本義と関連しているものになるのである。それに対して、「～ようものなら」は「ものだ」の基本義と直接結びつけて考えにくいと藤田 (2013) は主張している。「～ようものなら」の表現形式における「よう」は、意志や推量を表す「よう」でなく、「はずがない」「わけがない」「道理がない」といった特定の慣用的な言い方に前接する、かなり使用制限のある、連体法の「よう」であると述べている。さらに、「こうした「よう」は、話し手が叙述する内容を自分の現実世界から距離を置いたものとして述べる姿勢を示す標識」(藤田 2013: 149) として捉えられ、「現実二起コルコトハ考エラレナイ」や「現実二許サレルコトナドナイ」(藤田 2013: 150) という気持ちが打ち出され、もしくはうかがわせる形式である。それを踏まえて、ア)「～ようものなら」は、「現実から距離を置いて、必ずしも現実につながるわけではないという姿勢で述べる表現である。だから、仮に起こったら“困った”結果を招く事柄や、実際に起こるのだが、その結

果は好ましくないといった事柄を問題にするのにもっぱら用いられる。」(藤田 2013: 151) という結論が出されている。

藤田 (2013) の考えに従えば、「ものなら (ば)」に「ものだ」の意味用法が残存するという結論を出しにくい。当然のことながら、(19) と (20) のような形式名詞の「もの」にコピュラの「だ」の仮定形が後接した場合は対象外とする。

- (19) 「ええ、碁盤の目のようになっているのでしょ」

「そう。北から姉小路、三条通、六角通、蛸薬師通、錦小路。つまり姉三十六角蛸錦さ。京都に関心を持っているものなら誰でも知っている。」

- (20) 「ここにいらっしゃるのが楽しくて懐かしいものならば、わたくしの養子になっておしまいになってもいいんじゃないかしら」
「そんな…。考えたこともありません」

「京都に関心を持っている人なら誰でも知っている」「ここにいらっしゃるのが楽しくて懐かしい感覚／気持ちならば、わたくしの養子になっておしまいになってもいいんじゃないかしら」のように、(19) と (20) における「もの」は別の単語に置き換えられるため、その「ものなら (ば)」は助動詞の「ものだ」の仮定形とみなすことができず、形式名詞とコピュラとの組み合わせであると考えられる。

- (21) 多美は、なきたいような気持ちで、そう思った。そして、ほんとうにやめてしまうつもりで下を見た。下れるものなら、そのまま下るつもりだったのだ。が、多美の目にうつったのは、深く水をたたえた滝つぼだった。
- (22) 召集令状を受け取った私は、百メートルくらい離れた事務所までかけて帰ったが、足が宙に浮いて、よろけそうになってやっと事務所にたどり着いた。そして、『とうとう来ました』とそこにいた人たちに言うと、どっかり椅子に座り込んでしまった。恐らくこのような場合は、万歳を言って送ったのであろうが、私のしおれた顔つきを見てか、係長は『早く帰って、奥さんに知らせなさい』と私を慰めるように言ってくれたのがせめてもの救いであった。ここでもし万歳でもされようものなら、私の心はどうしようもなく乱れていたに違いない。万歳で送られるような『立派な軍人』になる気持ちなどこれっぽっちもなかったのだから。
- (23) 夜中の二時というと、みんな起きて、朝めしをかきこんで魚河岸へいそぎます。ねほけまなこで立っていようものなら、「こら、カツ！みそしるどうした」と、どやしつけられます。使用人の男たちもいて、家族がかなりおおぜいでした。

(21)～(23) の例文では、「ものなら」の前に可能形や「よう」が出てくる。例 (21) は、「下れたら／下れば／下れるなら、そのまま下るつもりだったのだ。」に置き換えられるのに対して、(22) と (23) は、「ここでもし万歳でもされようとしたら／とすれば／するなら、私の心はどうしようもなく乱れていたに違いない。」「ねほけまなこ

で立っていようとしたり／とすれば／するなら、「こら、カツ！みそしるどうした」と、どやしつけられます。」のような文に言い換えられない。(21)では、意志を表す「つもり」が主節に現れる一方、(22)と(23)において、その主節に自分の意志によってコントロールできない事態、そして話し手にとって望ましくない事柄が続いてくる。個人の意志でコントロールできる動作性動詞に続いた「～ようとする」とは異なり、「～ようものなら」は意志性が込められていないこともある。尾上(2001)は、「ひとたび走り出そうものなら、もうどうやっても止まらない。」(尾上 2001: 433)を1つの例として取り上げて、「う・よう」の用法の非終止法(限られた慣用的な言い方)を説明しており、その「そう」が意志や推量と関係なく〈仮定〉を表すと述べている。また、尾上(2001)は、「あろうはずもない奇跡を信じてしまった。」(尾上 2001: 433)における「よう」は〈可能性〉を表し、上記の〈仮定〉と区別している。しかしながら、その〈仮定〉の意味を持たせるようになったのは「よう」なのか、もしくは「ものなら」なのか、あるいは単なる接続助詞の「なら」に起因するのか、尾上(2001)でははっきり説明されていない。「はずがない」のような特定の慣用的な言い方に前接する連体法の「よう」を検討したうえで、「～ようものなら」の「よう」もそれと同様に、「話し手が叙述する内容を自分の現実世界から距離を置いたものとして述べる姿勢」(藤田 2013: 149)を示すという藤田(2013)の考えがより説得力のあるものだと考えられる。

例(22)と(23)における「ものなら」節は、実現可能性が低いと思われる事柄を仮定的に示している。(22)と(23)との相違点と言えば、前者の主節における事態は想像されるものであり、必ずしも起こることではないが、後者の主節における事柄はもしかしたらすでに発生したことのあることである。(21)から(23)までの例文はいずれも、「ものなら」を削除すれば明らかに非文になる。「もの」も別の単語で言い換えられない。(21)を〈一般性〉で解釈すれば、「一般的に下れるなら、そのまま下るつもりだったのだ」のような意味あいになり、実現可能性の低いことを前提とする「ものなら(ば)」の意味と矛盾が生じてしまう。「～ようモノナラ」は、後件に特定の内容を要求するという固有の用法をもつものであり、少なくとも「～モノダ」と直接結びつけて考えにくい点で、1つの複合辞的形式と見てさしつかえないもの(藤田 2013: 152)という指摘があったように、(「よう」を伴わない)可能表現の述部を承けるものも、可能表現でない述部を承けるものも実現可能性が低いという前提があるため、一般性のある事態や属性につながることは想定しにくい。接続助詞の「ものなら(ば)」はすでに助動詞の「ものだ」の意味用法を完全に失っており、意味上の関連性がまったく見られない。「ものなら(ば)」は「ものだ」の仮定形と同一の形態を持っているが、実現がほぼ不可能だと思われる事柄を仮定的に示すという「ものだ」にない意味が派生している。

以上の検討により、連用形の「もので」は〈一般性〉と〈情緒性〉を残しており、仮定形の「ものなら(ば)」は助動詞の「ものだ」の意味用法が残存していないことがわかった。助動詞の「ものだ」の性格の残存度について、「もので」>「ものなら(ば)」になるのである。

3.2 活用形がほかの接続表現と複合してできた形式

本節は、ほかの接続表現と繋がらないと従属節に使われにくい連体形の「ものな」と終止形の「ものだ」について論じる。

3.2.1 「ものな」+「のに」

「ものな」が助動詞の「ものだ」の連体形として取り上げられるのは、逆接表現の「のに」が後続した場合のみである。「ものなのに」に助動詞の「ものだ」の意味が残存することがあるにもかかわらず、「のに」が表す逆接の意味を失っていない。

- (24) 人間というものは、歳を取るにつれて角がとれて丸くなっていくものなのに、二子玉は丸くなる機会を自ら切り捨ててしまいました。
- (25) 勉強でも知識でも、本来、必要になれば自分から学ぼうとするものなのに、塾でさせられつけていれば、自分からするようにはならないでしょう。

「人間というものは、歳を取るにつれて角がとれて丸くなっていくものだ。けれど…」「勉強でも知識でも、本来、必要になれば自分から学ぼうとするものだ。が…」という文にしても文意が変わらない。意味上も〈一般性〉と逆態接続との組み合わせである。興味深いのは、〈一般性〉のみならず、「ものな」は、事態の実現が望ましいこととして捉えられている〈当為〉を表すこともある。

- (26) こんな時にこそ夫婦は支え合い、互いの絆を強くするものなのに、金次郎夫妻は違っていた。すでに不協和音が生じていた二人にとって徳太郎の死は決定的は打撃となった。

「こんな時にこそ夫婦は支え合い、互いの絆を強くするものだ。しかし、金次郎夫妻は違っていた。」という文にしても文意が変わらず自然な文である。しかし、「ものだ」を削除すれば、文意がまったく違ってしまう。この文は聞き手に言及する発話でないため、相手の行動を要求する発話内力が潜んでおらず、単なる発話の素材である第三者の行動に対する非難や文句を言うものである。「こんな時にこそ夫婦は支え合い、互いの絆を強くするべきであるが、…」という意味あい、意味上助動詞の「ものだ」の〈当為〉と「のに」との組み合わせであると考えられる。

助動詞の「ものだ」の性格の残存度としては、「ものなのに」は、「ものなら(ば)」より高く、〈情緒性〉まで残している「もので」より低い、という中間的位置にある。

続いて、終止形の「ものだ」を見よう。本稿は接続助詞の「が」と「けど」と組み合わせた「ものだが」と「ものだけど」を取り上げることとする。

3.2.2 「ものだ」+「が」

「ものだが」は形式名詞の「もの」にコピュラの「だ」が後接して、さらに接続助詞の「が」が連なってできた複合表現と、助動詞の「ものだ」に接続助詞の「が」が後

続した複合表現という2通りの構造パターンが存在している。本稿では前者を除外して、後者を研究対象とする。

- (27) “悪”は“死”よりも始末が悪いな、とグリーンは思った。死の翳は人間の肉体に
いやおうなく滲み出してくるものだが、人間の中に巣くう悪は決して外観には
現われない。身体は魂にとって牢獄であると言った哲人がいたが、どうやら悪
にとって身体は堅固な隠れ家たりうるようだ。
- (28) 女の子なんか、田舎から上京してくるとみるみるうちにキレイになって、そう、
いわゆる、“アカ抜けて”くるものだが、あれも都会の緊張感と他人の視線のな
せるわざだろう。
- (29) 昔は、男友だちが多い女性は、「あの人は、ちょっとね」といわれたものだが、
いまではボーイフレンドがたくさんいるのが普通で、いない者がみじめな寂し
い思いをする時代である。ボーイフレンドをつくるのも、男性より女性の方が
積極的であり、二人の間柄がオカしくなっても、女性の方があっさりと、つぎ
の相手を探すというタイプが、最近は多くなっているようである。

(27) と (28) における「ものだ」は〈一般性〉を表していると考えられる。(27) で
は、「一般的には、死の翳は人間の肉体にいやおうなく滲み出してくる」文は、それと
対比される「人間の中に巣くう悪」という属性を叙述する後件と、接続助詞の「が」
によって意味が連続した複文になる。一方、(28) は、(27) と異なり、「女の子なんか、
田舎から上京してくると“アカ抜けて”くるのは普通だ」という意味に逆接が加わる
ようなものではない。「関連のある二つの事柄を結びつけることを表す」(新明解国語
辞典第八版 2020: 225) 接続助詞の「が」は、「主節が疑い、疑問、納得できない気持
ちなどを表す文になる場合が多い」(角田 2004: 15)。(28) における「ものだが」の後
にくる文は、女の子が上京してアカ抜けてくる原因を考えて推量するものである。
(27) と (28) とは「ものだ」が〈一般性〉を表している一方、(29) は「あの人は、ちょ
っとね」と言われたことに対する〈情緒性〉が引き出される。

〈情緒性〉まで残しているため、「もので」と同様に残存度の高いものであると考え
られる。

3.2.3 「ものだ」+「けど」

「ものだけど」も「ものだが」と同様に、形式名詞の「もの」にコピュラの「だ」を
後接させて、さらに接続助詞の「けど」が接続してできた複合表現と、助動詞の「も
のだ」に接続助詞の「けど」が後続した複合表現という2通りの構造パターンがある。
本稿で研究対象として扱われるのは後者である。

- (30) 一途な想いは、ただのいやがらせとなっていたのです。相手を想っていたら幸
せを望むものだけど、彼女は自分の事だけだった。彼女も淋しかったのでしょ
う。

- (31) 「自殺の原因？知るわけがないじゃない。俺は関係ないけど、案外どこかのグループにいじめにあっていたんじゃないの。あのテの変に冷静な奴が気に食わなくて仕方がないって連中がいても、おかしくないから」
「いじめはなかったと思うな。そういう噂はすぐに広がるものだけど、わたしは聞いたことがないもの。それよりも彼って、神秘的な雰囲気があったじゃない。もしかしたらオカルトに走っていたとか」

(30) と (31) における「ものだ」はとられてしまえば、「相手を想っていたら幸せを望むけど」「そういう噂はすぐに広がるけど」のような文になる。いずれも文としては自然であるが、「相手を想っていたら幸せを望むのは普通だけど」「一般的に、そういう噂はすぐに広がるけど」のような〈一般性〉を表す意味がなくなってしまう。「けど」は前件と後件の事態を対比的に述べる用法以外に別の使い方も数多く存在しているが、(30) と (31) における「ものだけど」は〈一般性〉を有する前件の事態に、後件がそれと矛盾する事柄を対比的に結びつけるということを表しているのである。

- (32) 昔は、男友だちが多い女性は、「あの人は、ちょっとね」といわれたものだが、
いまではボーイフレンドがたくさんいるのが普通で、いない者がみじめな寂しい思いをする時代である。
(例 (29) の一部再掲)

「昔は、男友だちが多い女性は、「あの人は、ちょっとね」といわれたものだけど、…」の文が成立することから、「ものだけど」にも〈情緒性〉が現れうる。「もので」「ものだが」と同様に〈情緒性〉まで残しているため、残存度の高いものであると考えられる。

4. おわりに

「ものだ」に関わる諸形式は、主節の述部だけでなく、従属節に生起することもある。従属節に生じた場合、「もので」「ものなら (ば)」のような助動詞の「ものだ」の活用形がそのまま接続表現になるものもあるし、「ものなのに」「ものだが」「ものだけど」のようなほかの接続助詞と複合してできたものもある。また、助動詞の「ものだ」の意味の残存度が一致せずにいくつかの段階性が現れてきた。「もので」=「ものだが」=「ものだけど」>「ものなのに」>「ものなら (ば)」という順で意味の残存度が薄れていくと考えられる。

助動詞の「ものだ」の連体形は補充法によって別系統から借りたものであると述べたが、「ものである」それ自体が接続助詞になることはないにもかかわらず、従属節を形成することができる。「ものである」が従属節に生起することを今後の研究課題としたい。

参考文献

- 高橋雄一 (2010) 「複合辞の「ものだ」についての一試論—「内容節的な構造」を手掛かりに」『専修国文』87: 137-167.
- 高橋雄一 (2018) 「複合辞の「ものだ」と「ことだ」について—形式語としての「もの」「こと」の観点から—」藤田保幸・山崎誠 (編) 『形式語研究の現在』279-297, 和泉書院.
- 角田三枝 (2004) 『日本語の節・文の連接とモダリティ』くろしお出版.
- 坪根由香里 (1994) 「「ものだ」に関する一考察」『日本語教育』84: 65-77.
- 坪根由香里 (1996) 「「ことだ」に関する一考察—そのモダリティ性を探る」『ICU 日本語教育研究センター紀要』5: 45-62.
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味』くろしお出版.
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部モダリティ』くろしお出版.
- 藤田保幸 (2013) 「複合辞「～ものなら」について」藤田保幸 (編) 『形式語研究論集』125-154, 和泉書院.
- 初山洋介 (1992) 「文末の「モノダ」の多義構造」『言語文化論集』第 14 卷 1 号: 19-31, 名古屋大学.
- 山田忠雄ほか (編) (2020) 『新明解国語辞典』第八版小型版三省堂.

〈付記〉

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2119 の支援を受けたものです。本誌の査読者にたいへん有益なご指摘をいただきましたことを、心よりお礼申し上げます。また、ご指導くださった加藤重広先生にはたいへん感謝しております。

(ちょう りきたん・北海道大学大学院博士後期課程)